

和倉温泉短歌大会講演

平成二十五年九月十二日（木）

「短歌の主題」

佐佐木 幸綱

（ゆきぎな ゆきつな）

能登の海で生まれた歌

これまで能登半島には何回も来ています。特に若いころは毎年泳ぎに来ていました。能登がまだ「秘境」と言われていた、そんな時代の話です。最初に来たのは、二十代の終わりです。河出書房という出版社に勤めていたんですけど、その出版社が倒産しましてね。それをきっかけに編集者はやめようと退社をいたしました。倒産した会社ですから、ほとんど退職金なんて出

なかつたんです。よく覚えていないんですが、当時の月給は十万円いかなかったんじゃないかと思えます。一応、『文芸』という雑誌の編集長だったものですから、他の人たちよりはちよつと良かったんですけど。たしかね、二カ月分の退職金をくれたんです。それを全部持つてね、能登半島に来ました。能登金剛とか巖門、ちよつと西側のほうです。まだ独身時代で、彼女と一緒に来ましてね。とにかく「退職金を全部使っちゃおう」ということで（笑）。毎日泳いでいました。それから、なんとなく能

登は親しくなって、夏になると能登半島に泳ぎに来了ました。金沢まで夜行でやって来て、それから乗り換えてね。たいへん遠いところだったからこそ、本来に来た、という感じがしたんだろうと思います。こういう機会だから、歌を見ていただくと思います。倒産した会社を辞めて失業した男が、退職金を持つてやって来たときの歌であります。

水を蹴つて真逆さまに潜りゆく逆しまの
われ未練残すな

佐佐木幸綱『群黎』

ふいにのそりと浅瀬に立ちし男あり
過去の俺は俺が殺つちまったのに
立ち泳ぎの我を残して夕暮るる錆色
の海藍の島山

全部、能登半島の歌であります。能登半島の歌はわりとたくさんあるように思いますが。

家族を詠い続けた河野裕子

今日は「短歌の主題」ということでお話ししたいと思います。「何を詠うか」ということです。短歌を作るときには、何を詠おうか、今日の朝飯のことを詠おうか、ニユースでやっていたことを詠おうか、あるいは息子がしたことを詠おうか。いろいろなことを考えて、何を詠うかを決めるわけですね。

今日の話の大筋は、自分の主題——自分のホームグラウンドというか、ここが自分の得意分野であると、そういうものを持っていたほうが、歌を作るときにはいいだろ

うということですね。そういったことをいろいろな角度からお話しできればと、思っています。

何でもいいんです。僕はお酒が好きですから、お酒の歌を一所懸命に作ろうとします。そうすると、だんだんライバルが見えてくるわけです。若山牧水には負けまいとかね（笑）。牧水という人は、一生のうち三百六十首、お酒の歌を作ったんです。そうすると、僕は三百六十よりたくさん作ろうと、一所懸命に作りますよね。他にも中国では李白とか陶淵明とか、酒好きの詩人がいっぱいいます。そういうものがある。だんだん見えてくるようになってくる。僕はもう、若山牧水よりも酒の歌をたくさん作りました。ただ、若山牧水は四十三歳で死んじゃっていますけれど、僕はもうその倍近く生きていますから、これじゃあいかんということですね、もうちょっと酒の歌を作ろうとがんばっています。

一昨年亡くなった河野裕子さん。あの人は意識的に家族の歌を作っていました。もちろん旅行の歌もあるし、友達が出てくる歌もあります。ただ、自分のメインは家族

の歌だということを意識して、そういった歌の作り方をしていたということです。

君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よ
ざんざんばらんと髪とき眠る

河野裕子『桜森』

まだ子供たちが小さいころですね。ヒステリーを起こして、ついつい夫を殴り、殴るといふのは違うかな。子供さんに平手打ちして、そして髪を振り乱して、そのままの格好で寝ちゃったという歌です。

浴室の磨硝子の向かうに屈む子を大
きな螢のやうにも思ふ

河野裕子『体力』

これは、なかなかいいでしょう。年頃になつてきた女の子が磨りガラスの向こうでちよつとしゃがんだ感じになっている。磨りガラスに透けた身体が白さとなって、風呂場の明かり、磨りガラス、湯気、そういうものの中で、ほんわりと明るく点つていくような感じに見えた。自分の娘の新しい

面を見た。何度も何度も詠っているとね、

その人の新しい面が見えてくるということがあるんです。家族の歌を作り続けていないと、こういう歌はなかなかできません。

僕も、そういう歌を作ったことがあります。息子がいるんですけど、大学生になったときにおたふく風邪になったんです。ある程度の年になってからやると、たいへんなんですね。「どのくらいになったのか、お前、顔を見せろ」と言って、顔を押しえて真正面から見た。考えてみると、大きくなった息子の顔を近くに寄ってじっと見るなんてことは、ほとんどないですよ。むしろ嫌がりますしね。そのとき初めて、久しぶりに息子の顔を真正面から、三秒か四秒見たなという感じがしました。息子のことはみんなわかっているように思っていたけれど、そうではないということがわかって、ぎくっとした感じがいたしました。

寝てばかりいる子が日の暮れ起きてきてあ、雪だと言ひまた寝にゆく

河野裕子「庭」

これは多分、男の子だろうと思います。

就職が決まってるか、まだ学校に行っているのかもしれないけれど、この年頃の特に男の子というのはよく寝ますよね。昨夜からずっと寝ていて、昼間になっても寝ている。夕方ぐらいにちよつと起きてきて、水か何かを飲んで便所に行つて、庭をちよつと見て「あ、雪だ」と言つてまた寝に行つちやつた。それだけのことですけれど、なにかこの年齢の男の子のちよつと無愛想な、親に対して照れるような感じ、親にあまりサービスをしないような感じ、こういうものがよく出ている歌だなあと感じます。

手をのべてあなたとあなたに触れた
きに息が足りないこの世の息が

河野裕子「蟬声」

これは、河野さんの最後の歌だということとです。この歌を詠んで、あくる日に亡くなったという、そういう歌です。「あなたとあなた」というのは誰かという、家族の人たちですね。単数ではなくて複数の家

族、自分にとって大事な家族。その家族に

もうちよつと触れていたい、今も触れたいと思つているのだけれど、手を伸ばしたり起き上がったたりする体力、気力がなくなつてしまった。最後の最後まで家族の歌を作つて、この人は死んでいったわけです。この人は、なんとなく作るのではなくて、意識的に家族の歌を作ろうと決心して作り続けていたのだと、私は見ています。

主題を持つと世界が広がる

僕の話をするすと、先ほど水泳の歌を出しましたが、ずっとスポーツの歌を作ってきました。高校時代まではまったく勉強しないで、スポーツばかりやっていたものですからね。最初に短歌の世界で認められたのがラグビーの歌でした。ラグビーの歌を作る人なんていなかったもので、珍しがられました。

僕は一つの大学をやめちゃつて、違う大学を受け直したんです。その間、友達はみんな大学生でしたから一緒に遊んでくれない。そこで、一人で遊べるものは何かない

かと探したら、家のそばに後楽園ジムというのがありましてね。そこにボクシングをやりに行き始めて、結局、大学に入ってからもしばらくやっていて、三年以上やりましたね。その会長が、白井義男さんという日本で最初に世界チャンピオンになった方でした。当時は、後楽園ジムしかちゃんとしたジムがなかったものだから、外国の選手が日本に来てタイトルマッチなどをやるときの公開スパーリングなどは、だいたいこの後楽園ジムでやったんです。そうすると、僕みたいにそこでやっているやつが世界チャンピオンとスパーリングをやる。ヘッドギアをかぶってね。白井義男以外にも、あと二人、世界チャンピオンとスパーリングをやったというのが僕の自慢でしてね（笑）。そういうことを歌にしてみましたから、スポーツの歌がたくさんあったんです。

あとね、私は「父と息子」という主題で歌を作ってきました。親父は早く死にましたが、親父が生きているときは息子として親父の歌を。自分に息子ができてからは父として息子を詠う。そういうことで、父と

息子ということを意識的に詠ってきました。

父と息子の問題というのは、いろいろな問題と絡んでいるわけです。たとえば天皇制も結局、父と息子の問題になってきます。村上春樹も、父と息子のことをずいぶん小説に書いています。ギリシャ神話のオイディプス王も、もちろんそうです。「父と息子」という主題を持っていると、いろいろなところと関係しているということがわかってきて、それを少し意識することによって、詳しく読むようになってくる。意識したことによって、「父と息子」という角度で世界を見ることができるようになってくるわけですね。

もう少し、自分の話をします。僕の家には、梅の木が二本、白梅と紅梅が一本ずつあるんです。なんとなくかわいがっていて、毎年、花が咲けば詠ってやる、花が咲かないときも、「夏の梅」とか「梅の木に雪が降っている」とかね。東京の家ですからそんなに大きな庭ではありませんけれど、他の木もあります。珍しいところでは、宮崎県日向市の木で「へべす」という

木があります。「平兵衛さんが作ったお酢」という意味で、カボスやスタチと同じような、酸っぱい実がとれるんです。この実を搾って焼酎に入れて飲むと非常においしいからと、宮崎の人がわざわざくれたものです。そんな木もあるのですが、「へべす」はそんなに詠いませぬ。

このように、「主題」というと難しいけれど、なんとなく「ああ、そういうことなんだな」ということが、少しずつおわかりいただけたかと思えます。

たとえば、「富士山」。世界遺産になったというところでワイワイとやっていますけれど、富士山を意識的に主題とした歌人は、前田夕暮と若山牧水ですね。前田夕暮は百八十数首、若山牧水は百三十首富士山の歌を作っています。牧水には富士人ふじひとという息子さんがいます。若山牧水は宮崎の人だけれど、沼津に住みます。なぜ沼津かということ、富士山が近くにあるからということでした。一種の富士山ストーカーをやっているを送るわけです。

歌人だけではありません。横山大観も富士山をたくさん描いています。それから、

片岡球子さん、百歳を超えてからの富士山の絵が十数枚あるんじゃないでしょうか。

写真家の岡田紅陽^{こうよう}さんは、富士山の写真をたくさん撮りました。世界の人が富士山のことを知るようになったのは、この岡田紅陽さんのおかげです。富士山の写真をいっぱい撮って、パリだとかニューヨークで個展をやったんです。

このように、花ばかり描いている人、犬ばかり描いている人、人物ばかり描いている人、いろいろいます。

俳人の主題は歳時記から

歌人は、自分で主題を決めなくてはいけ
ないけれど、俳句というのは主題を決め易
いシステムがちゃんとできている。俳句の
人はどうやっているのかといいますと、ひ
とつは歳時記。歌人も歳時記は持っていた
ほうがいいですね。いろいろな歳時記があ
ります。「ホトトギスの歳時記」とか、
「誰々の歳時記」とか、つまり、「ルールが
ないと面白くない。ルールを自分たちで作
って、そのルールを守って作ろうよ」と、

そういうことです。

たとえば、今は秋ですが、歳時記を繰る
と「鰯雲」とか「月」「霧」「虫かご」「運
動会」「鹿」「啄木鳥」「鰯」「萩」「菊」と
かね、そういうものが出ています。それを主
題にして作ればいいわけです。普通は鰯の
ことなんて考えたことはないけれど、歳時
記を見ていたら「鰯」という言葉が出てく
る。そうすると「昨日食った鰯がどうだ」
とか「今日、魚屋に行ったときに見た鰯が
どうだった」とか、「鰯の好きな友達がど
うだった」とかね。「鰯」を軸にしてい
ろんなことを考えるでしょう？ それでい
いわけですよ。そういうきっかけを、歳
時記は与えてくれる。俳人は、そうやって
自分の主題を決めている。

あとは吟行会ですね。よく旅で俳句の人
と一緒にいますが、俳句の人はすぐに手
帳を出して書いていますね。僕らは人前で
書くのはかっこよくないと思いますし、
ほとんど書きません。俳句の人たちは、見
た瞬間に忘れないように書いておくとか、
そういうことを先輩から教えられているわ
けです。

たとえば、高浜虚子の有名な句で「流れ
行く大根の葉の早さかな」があります。な
んだか良いのか悪いのかわからないような
俳句ですけれど、これは、吟行会の人に
作った句です。僕は世田谷に住んでいるの
ですが、近くの九品仏という所に小さな川
が流れていて、そこでお百姓さんが大根を
洗っている。「大根」「大根洗う」が季語で
す。沢庵を作るために洗っていると、葉っ
ぱが落ちて川を流れていくところを見たの
でしょう。

みなさんも、吟行会のように、友達と一
緒に行って同じものを見て作るという、俳
句の人の真似をしてみるのもいいのかもし
れません。短歌は自分で主題を探して、主
題を自分で決めて作る以外はないだろうと
思います。

題詠が主流だった古典の世界

ご存知のように古典の時代には題詠が主
だったのです。題というのはたとえば「立
春」あるいは「春立つ」、「雪中梅」、そう
いえばこういう名前のお酒がありますね

(笑)。梅が咲いているのだけれど、そこに雪が降っている。それを題にして歌を作れということなんです。それから「雪中の鶯」。雪が降っているのだけれど、鶯が鳴いている。つまり、冬がまだ残っていると。春が来ている。そこを題にして歌を作る。こういう題で、みんな歌を作ったわけです。

たとえば「初恋」と言えば、「初恋とはこういうものである」という日本人の考え方のパターンとがあるわけですね。「初恋」という題が出たら、先輩たちの初恋の歌をピックアップしていく。全部はできませんけれど、できるだけたくさん引き出して、それを勉強するわけですね。そのために『類題和歌集』という、題で分けられている歌集が、昔はたくさんあったんです。それで先輩がどういう歌を作ったのかを洗い出すんです。

今回、みなさんに出されたのは「祭」という題でした。そういう題が出ると、「昔の人はどういう祭の歌を作ったか」「河野裕子はこういう祭の歌を作っていたのか」「北原白秋はこういう祭の歌を作っていた

のか」「石川啄木に祭の歌はあるのか」など、そういうことを調べる。それが楽しい。そして「先輩たちは、祭の本質をこういうところで見えていたんだ」と、「自分は、それにどういうものを足していくのか」「そこからどういうものを引いていくのか」。これが短歌は伝統詩であるということとですね。短歌というのは五七五七七の定型詩であり、長い歴史のある伝統詩であるということ。この二つが短歌を成立させている基本的な要因です。特に後者の「短歌は伝統詩である」ということをきちっと踏まえて歌を作ろうというのが、昔の題詠の基本的な考えだったのです。

しかし、みんなが題詠で詠うと、同じようになっちゃう。個性が出ない。月並みになっちゃいます。こういうふうなことを感じ始めました。明治になると、我の時代、個人の時代、自我の時代になっていくわけですよ。昔の人の伝統などはどうでもよくて、「明治になって時代が変わったのだから、昔の人よりもヨーロッパの人の真似をしようよ」とか、「ちよんまげなんてもうやめて、洋服を着よう」ってなことを考える。

そのときに「立春」や「雪中梅」などの題で歌を作ったって、面白くもなんともない。伝統より、むしろヨーロッパの詩人たちの詩を真似して、日本にないものをそこに出したほうがいいのではないかとこの動きが出てくるわけがあります。これが『新体詩抄』などになっていきました。これによって、題詠ではない何かを作ろうというふうになったのです。

明治のそういうときにも、まだ伝統的なやり方をしてきた人が、いたことはいました。代表的な人は樋口一葉ですね。樋口一葉は、昔の題詠をずっと続けて歌を作っていた。彼女は、明治二十年代に死んでしまいましたが、時代の、ちょうど分かれ目にいる人です。彼女は、あれだけのセンスがある人ですから、明治の時代の新しい空気というものを敏感に感じていた。小説などは、そういうところがあるわけです。そんな彼女でも、歌の世界では伝統詩としての和歌、短歌を作っていた。中島歌子の「萩の舎」という短歌の塾の代稽古として、先生の代わりにお弟子さんの歌をみるなどして、お金を稼いでいました。そういう人も

いたわけですが、だんだん変わってまいります。

ヨーロッパの文芸観の影響

結局、最終的にどのようなようになっていったのか。今みなさんは、特に主題なんて決めないで、なんとなく日記をつけるみたいに歌を作っているのだらうと思います。先生によつては「短歌っていうのは日記と同じだから、今日あったことを丁寧に思い出して五七五七七にしなさい」というようなことを言います。

また、「何を詠うかじゃなくて、どう詠うかが大事なんだ」と。どう詠うかというときに、写生をするのが大事だと言います。今日起こったことは、昨日起こったこととは違う。それを見分けるにはきちつと見ないとだめだから、という論理でやるわけです。そして、日記をつけるように短歌を作るといふやり方が、だんだん、だんだん出てきます。

この考え方はどういふことかというのと、明治以前は詩の時代で、ポエムのほうが小

説より大事だったわけです。江戸時代、読本とか合巻ごうかんと言われる小説は、詩よりも一段低く見られていますよね。十返舎一九とか、みなさんも何人かご存知かと思えます。散文のほうが低く見られていたわけですから。これが明治になるとそうではなくなります。ヨーロッパの文芸観が入ってきて、小説のほうが上になって詩歌は下になってくる。そういうときに、短歌がなんとかして小説と対抗したい、負けまいようにしたい、それでどうするか、ということですね。一生かかって大長編を書く。毎日、日記を書いてそれがひとつの流れになれば、一生かかってひとつの大長編を書くことになりやすいですね。それをやれば小説と対抗できるのではないか、というようなことが言われ始めます。

勘の良い方は、もうお分かりになるかと思えます。編年体の歌集を作るといふことです。たとえば、五年間のものが一冊に入っているとすると、前のほうに古い歌を入れておいて、だんだん新しくしていく。そうすると、五年間の時間の流れに沿った、一人の人間の生きた足跡みたいなものがス

トリーになります。それを、ずっと続けて、五年ずつの歌集を十冊出すと、五十年間かひとつの流れになって読めるようになる。朝飯は何を食ったとか、どこに旅行したとか、どの女にふられたとか、一人の人間の生き様、生きている心の記録のような形になります。そうすれば、もしかしたら『夜明け前』みたいな大長編に、あれは親子三代が出てきますが、そういうものと張り合えるものができるのではないかという考えを持ち始めたんです。

そういうことを考えると、編年体の歌集というのは、いつごろ誰が作ったのかということが大事な問題になりますね。昔は「家の集しゅう」または「家集かじゅう」といました。みなさん方がご存知のものですと『山家集』とか『拾遺愚草』などがあります。

『山家集』は西行です。一生に一冊歌集を出すんです。自分が晩年になって出す場合もあるし、先生が死んでしまったあと、弟子が編集する場合がありますが、一生に一冊です。この場合、編年、いつ作ったかということとは関係ありません。たとえば「立春」なら、その人が一生のうちに作っ

た立春の歌でいちばんいいものを出すので
す。『山家集』を読んでも、西行がいつ作
ったのかわからない歌がたくさんありま
す。それでいいのだと。人間は、何歳のと
きに何をしたか、成長がどうだったか、な
んて考えない。そんなことはどうでもいい
んで、トータルでこの人は「立春」につい
てどういう歌を作ったのかということが大
事である、というやり方をしたのです。

編年体の歌集が生まれる

「家の集」から「歌集」の時代になりました。
平野万里の歌集がいちばん早い編年体
歌集です。明治四十年です。その次が若山
牧水の『独り歌へる』。それから前田夕暮
の『収獲』というのがあります。これは逆
年順ですけど。つまり、明治の終わり、
明治三十年代後半から四十年ぐらいにこの
ような考え方ができて、少しずつ定着し
て、これが一般化されてゆくわけです。斎
藤茂吉などは、その典型であります。大正
二年、『赤光』のときは編年体ではなく主
題別に歌を並べています。それを大正十年

に順番を入れ替え、時間順に並べていきま
した。日記のように歌を作る人は、日記の
ように歌を作ってかまいません。

それは、今申し上げたような経過があつ
て、明治四十年代に初めてそういう考え方
や認識が出てきて、大正時代に一般化され
たものであるということです。そういう中
で、先ほどの河野裕子とか、若山牧水と
か、主題、あるいは意識を持った歌人が何
人も出てきて、そして、それなりの仕事を
したということです。若山牧水は四十三歳
で死にますけれど、旅の歌人になろうと意
識し始めます。三十代、三十三歳ぐらいだ
と僕は見ています。

ただ旅をすれば旅の歌人になれるわけ
はありません（笑）。旅の歌人になるため
に何の勉強をしたかというところ、ひとつは植
物の名前を覚えるということでした。植物
園に通ったり、野草をよく知っている友達
に教わったりしたわけです。もうひとつ
は、鳥の名前を覚えるということでした。
鳥の鳴き声、鳥の姿を見て、鳥のことをよ
く覚える。みなさん方は、一首の中に鳥の
名前が四つという歌は作ったことがないだ

ろうと思います。

次に、竹山宏さんという人がいました。
原爆に遭った方です。この人は、原爆を主
題にして歌を作っておられました。すごい
のは終わりのほうですね。

居合はせし居合はせざりしことつひ
に天運にして居合はせし人よ
炎去りゆきし瓦礫を人掘れりいのち
得てすることのはじめに

竹山宏『千日千夜』

これは原爆の歌かとお思いかもしまし
せんが、そうではなくて、阪神大震災の時
の歌です。今回の東日本大震災の歌だと言
っても、おかしくはない。被爆した後、震災
の後、人間はみんな同じようなことをやる
んですね。この人のすごいところは、その
後です。自分の主題は原爆だということ
とを決める。

二万発の核弾頭を積む星のゆふかが
やきの中のかなかな

竹山宏『千日千夜』

原爆をわれに落しし兵の死が載りを
れば読む小さき十六行

竹山宏 『空の空』

後の歌は、ウイニーという機長が死んだ
という記事を主題にしています。前の歌。
核が今、世界にいくつあるか、みなさんの
中にご存知の方はおられないだろうと思
います。これは、ちゃんと出ています。長崎
大学核兵器廃絶研究センターという所が、
リアルタイムでホームページに出していま
す。それを見ますと、米国七七〇〇、ロシ
ア八五〇〇、中国二五〇、フランス三〇
〇、イギリス二二五、インド九〇、一
〇、イスラエル八〇、パキスタン一〇〇、
一二〇、北朝鮮一〇。これが二〇一三年八
月現在。今、全世界には一七三〇〇発の核
弾頭があります。これは、主題を意識して
調べていないとわからない。この人は、き
ちっと調べるということを、八十歳を超え
ても死ぬまでずっとやっておられた。「主
題を持つ」というのは、そういうことであ
ります。

ベーシックな「なぜ主題なのか」「いつ

ごろからそういうことを言い始めたのか」
「なぜなのか」ということを理解してい
ただいたほうがいいだろうと思って、こうい
う話をいたしました。

竹山さんの歌などを丁寧読んでいた
くと、主題を持つというのはこういうこと
なんだ、世界とこういう付き合い方をす
ることが主題を持って歌を作ることなんだ、
ということがおわかりいただけるかと思
います。

